成ができた。

昭和五十三年五月頃、松江市東長江町の松浦進さんが突然来宅され、会の目的主旨の説明があり入会の勧誘を受けた。

抑留中のつらい苦しかった当時の生活を話し合い、異境の地で死亡した戦友には気の毒ではあるが、お互いに九死に一生を得て無事帰国できたことをよろこび合った。

初対面であったが、抑留中の共通の話題に花が咲き、長年親交のあった知人の気持がした。早速入会手続をして今後の会の運営活動に協力を約束した。

松浦さんは、昭和二十四年七月に復員され、島根県経済農協連の一級建築士管理事務所所長として就職、定年退職後は大原郡大東町の上代工務店に再就職、専務として会社業績の向上に活躍されたと聞いています。現在は非常勤役員として在籍して居られます。

昭和五十三年の全抑協島根県連合会発足時から副会長として会の運営に精励されていましたが、平成四年度から県連合会会長並びに財団法人全抑協理事として重責の遂行に尽力されています。

私は当初から、松浦会長を人格、識見共にすぐれ、リーダーシップの持主であると敬服しています。

松浦家は代々続いた素封家で、進さんは地元でも人望があり、現在、神社の責任役員、町内老人会会長等の要職に就いて地域発展のために寄与されています。

（島根県　本田　吉則）

シベリア抑留と吾が人生

新潟県　高橋吉郎

仏教の教えでは、人間には前世と後世、現世とがあり、前世に悪いことをしていると現世には苦しまなければならないといい、現世に良いことをしていると後世には極楽浄土に行けると教えている。人間はすべて運命づけられているという。

私は、前世に余程悪い事をしていたと見えて、現世には地獄でもあれ程の苦しみはないであろうと思う程

の苦しみをソ連から受けた。それは終戦後ソ連からシベリアに強制抑留され、強制労働や重労働をさせられたことである。

幸い九死に一生を得て懐かしい祖国に帰ることが出来たが、此の苦しみは終生忘れることは出来ない。

昭和十八年十月五日、召集令状により、会津若松東部二十四部隊に入隊を命ぜられた。新潟警察署に勤務している際にこれを受け、町内会の皆さんや署員の皆さんに万歳万歳と万代橋を渡り新港駅まで送っていただき、郷里十日町に帰り肉親に別れを告げ村人に送られた。

十日町駅で日の丸の旗をタスキに掛け、カーキー色の国民服に戦闘帽といういでたちで、勝って来るぞと決意も新たに、日の丸の小旗を千切れるばかり打振う村人達に送られた。

列車の窓から感激の涙がこみあげてくる。手を振りながら勇躍征途についたのがつい此の間のように思い出されて来る。

会津若松東部二十四部隊に無事入隊し、二週間の訓練を受けて昭和十八年十月二十日、当時の満州東安第一三八七部隊に転属した。

同十月二十日から翌年の二月まで満四か月酷寒零下三十度の東満の荒野で初年兵教育を受けた。演習が終ると軍歌を歌いながら、ザック、ザック、と行進したものであった。

勇敢な思い出は小隊長であった。柳沼八郎小尉が匍匐前進の際に、いきなり立ち上り、突撃にまえーと号令を掛け日本刀をぎらりと抜きこれをふりかざした。

殺気立つと我々は腹這となっていたものが立ちあがり、銃剣を構えて、ウワー、ウワーと敵陣めがけて突っ込み全員火の玉となって肉迫する姿であった。その勇気は血沸き肉踊る勇姿であった。

日本軍は世界一強く特に関東軍は泣く子もだまると言われただけにその訓練も一段と厳しかった。

昭和二十年八月七日と記憶しているが、我が部隊は太陽がギラギラと照りつける夏の盛りの夕方に移動することになった。いずれに行くかは我々には教えなかった。

列車の中で夜間不審な爆音がする、飛行機が飛んで行ったと思っていると、ソ連が我が国に一方的に宣戦を布告して来たという発表があった。

我々は一斉に緊張し何とも形容しがたい雰囲気にとらわれた。

朝になって牡丹江に着くと、ジーゼルカーのトロッコに白鉢巻の戦闘帽をかぶり緊張した将校が立ち、兵は座して数台次々と我々と反対方向へ国境にむかって前進して行った。

我々は後方に下って行く。これはどうしたことかと思っていると列車は四平街に着き、指導学校に駐屯した。

不可侵条約を一方的に破棄し侵攻して来たソ連軍は、東安・黒河・ハイラルの三方から二十五名乗りの戦車で矢のように侵攻して来た。

後で聞くところによると、日本軍は奉天に於いてソ連軍を迎え打ち、国境へ向う部隊にソ連軍を包囲しこれを撃滅する作戦であったという。しかし不意の急襲で間にあわないのか四平街の駅はものすごい混雑振りであった。

列車は次々と避難民を乗せて下って来る。列車は黒煙をはきボウーボウーと悲愴なさけび声をあげるが如く鳴り響く。四平街の駅はごったかえしていた。ソ連軍の飛行機で戦闘機からは急にドカドカン、ダダッと機銃掃射をあびせかける。夜に入ると彼等がドカンドカンと発砲する音がして不気味である。いよいよ戦闘と覚悟を新たにしていると昭和二十年八月十五日天皇陛下の玉音で停戦となった。

体から力がいっぺんに抜け残念な気持ちと戦いが終ったのでホッとした気持ちがいりまじり、涙がこみ上げて来た。

間もなくマンドリン小銃を携えたソ連兵が警戒しながらウロウロと我々が駐屯している指導学校に入って来た。

彼等はすぐ立ち去ったが、今度は一般邦人婦女子が兵隊さん助けて、と恐怖におののきながら入って来る。

近くでゴーゴーという音が二昼夜もしていた。その音はソ連軍に引き渡す戦車や牽引車（大砲を積んだ

車）などの兵器を渡すため日本軍が四平街の飛行場に運ぶ音であるとのことであった。

やがて我々は日露戦争の名将児玉源太郎大将の豪筆になる忠魂碑の立つ児玉公園でソ連軍により武装解除を受けた。

全く残念であった。戦わずして敵の軍門に降るくやしさ情けなさは我々戦友はひとしく痛感したであろう。

我々の部隊に憲兵が入って混成部隊となった。その日の昼下り陽木林に集結した。陽木林の兵舎で見事なヒゲをたくわえた篠原新一憲兵准尉が分隊長となった。

柔和な笑顔で人柄の良さそうな人で、我々によろしくと挨拶した。当時の憲兵准尉ともなれば堂々たるものであった。篠原さんとはイルクーツクで行動を共にし三年余りお世話になった。実に人柄の良い人格者で、私は尊敬していた。

さて我々は陽木林で約一か月間待機した。旅順港の方面は南下した一般邦人の引揚げで港が混雑しているのでウラジオストックから帰還することになるなどの噂が流れたが、兵舎の四囲に赤旗が立てられ、ソ連の歩哨が監視警戒し始めた。

私はこれはおかしいと直感した。帰還する我々にソ連兵が監視する必要はないと思った。陽木林の兵舎前の広場にも未だ数多くの兵器がこれは大砲を積んだ牽引車などがずらりと並べられていた。遠くを眺めると軍馬の死体が銃で射殺されたのか両足を天空に向け硬直していた。数十頭、たくましい馬が、大砲を引く馬車であろう異様な光景を呈して見える。

灰色の空の下に浮ぶ光景は我々のこれからの運命を暗示しているが如く、数十頭の群は不気味に見えた。

炎天下に長く続く道路端には続々と集結して来る友軍の兵士が疲れ果てた姿で眠っている。それは死んだような痛ましい姿である。

その中に一人腰を下し遠く青空の彼方をじっと見つめて放心している兵がいた。彼は遠く故郷に残して来た妻子を思い出しているのだろう。

戦争は残酷である。敗戦のみじめさをひしひしと痛感された。我々は秋風の立つ昭和二十年八月二十七日、思い出の地、陽木林を後に満鉄の貨車に乗せられ、ソ

連兵の監視のもとに北へ北へと送られることになるが、貨車の中で秘密要塞構築の使役に使われ銃殺されるなどのデマが飛んだ。

死刑の宣告を受けたように実に不安な気持ちが脳裏をかすめる。

列車は一日走っては二日、三日、と停車し遅々として進まない。ソ満国境の黒河に着いたのが十月も終りに近づいた頃で、黒河ではソ連軍が侵攻して来た街であっただけに激戦の後生々しく爆撃の跡が歴然としていた。

黒龍江の満州側の対岸には見渡す限りの糧秣が野積みにされていた。関東軍六十万の人員が五か年間過ごせるというぼう大なる糧秣がソ連に占領されてしまった。

その上にソ連兵が勝利の凱歌を唄っている。その姿を見て、此の糧秣は銃後の人々が勝ってほしいと血と汗を流して送られたものである、不法に一方的に火事場泥棒のようなやり口で奪い取って、と憤怒の涙がぐっとこみあげて来る。

昭和二十年十月三十一日、長い黒龍江に米国製の鉄舟を横に並べその上に厚板を敷きつめた鉄舟橋を渡り、ソ連領ブラゴエシチェンスクに着いたのが夕やみ迫る頃であった。

同所の駅に二、三泊してアムール鉄道の貨車に乗り人口六十万シベリア第一の都市イルクーツクに着いたのが同年十一月十日であった。

駅で一泊して翌十一月十一日同市郊外にあるイルミジョウという所に収容された。既に零下五・六度になって、雪が二十センチ程積もっていた。

此の収容所は第六収容所と記憶しているがこれから半年間の厳冬に地獄より苦しい目にあわされることになる。

にわか造りの生木の松丸太で建てられた収容所の周囲は盛土で覆われ、ベーチカが中央にあって二階建てであった。実に粗末なもので、外周は四方に望楼が建てられソ連兵が銃を持って監視している。

鉄条網が張りめぐらされ、これが二重になっており、厳重な構造で我々は重罪を犯した囚人の扱いである。

我々が何をしたというのか、収容された我が軍の少佐が、屈辱的な人道に反した扱いに憤慨し、我々はだまされ、だまされながら、遂に捕虜になって、と悔しがっていた。

全員を前にして言う少佐は、勝てば官軍負ければ賊じゃ、とつぶやいていた。全くその通りである。我々は祖国のため天皇陛下のため命を投げ出して出征して来たのである。

少佐は全軍を前にして悲壮に涙ぐんだ声であった。我々は天皇陛下の、耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び、という玉音を胸に秘めすべて国のため天皇陛下のためにも覚悟を新たにした。

収容所の中は板敷きで畳一畳に二名というせまさで、横になって防寒外套を着たまま寝るよりほかにない。寒さに慣れないのでなかなか寝つかれない。収容されて一週間食糧は支給されない。空腹で体がふらつき力が抜けてだるい。一週間後ようやく凍った黒パンが支給されノコギリで六等分し一人二百グラムのパンと、名ばかりのスープであった。まさに囚人よりひどい扱いであった。

やがて零下三十度、四十度にもなる極寒に屋外作業に出された。鉄のように凍結した土をロームといって直系三センチ、長さ一・五メートル程の鉄棒で土にドスーン、ドスーンと打ち下ろしての穴掘作業である。

ソ連兵で歩哨達の兵舎を建てる柱の穴だと分かったが、とても掘れるものではなかった。ピーン、ピーンとはね返って来る。十二月も半ばを過ぎると屋外は零下三十度、四十度にもなる。

空腹と寒さで力は出ない、能率はあがるものではない。少しでも手を休めると寒さに慣れているマッセル（監督）がダワイダワイ（やれやれ）とどなりつけて来る。体の弱い体力のない戦友はふらふらになるとマッセルが地獄の赤鬼のように怒りどなりつけ、さては足でけ飛ばし、ヨツポイマーチーと悪口雑言を浴びせ、さらにつばをはきかける。実に程度が悪い。ソ連の歩哨が見てもあえて止めようともせず、あざ笑っている。屈辱この上もない有様である。

バイカル湖の方面から白い霧のようなものが風に

のって吹いて来ると、吐息が防寒帽に凍りつき、サンタクロースのように毛が白くなり、頬が赤くなって針をさされるように痛い。じっとしていると凍傷になる。足踏みをして、これに耐えるが、いても立ってもいられなくなる。僅か一時間が苦痛でとても長く感じる。このような苦しみは体験したものでないと分からない。

いつも、戦い華々しく散ったほうがよい、何が因果で生きていなければならないのかと思う程であった。

やっと作業が終っても、収容所に帰りほっとしても夕食は二百グラムの凍った黒パンと形ばかりのスープである。食べたあとも空腹である。

入浴をしないのでシラミが湧き腹巻にゴマをまいたように黒く着く、防寒外套を着たまま横になって寝るとモゾモゾとシラミが活動し始める。疲れているので眠りに入るが体力は弱るばかりである。

やっと日曜日に三キロもある山越しで町のバーニャ（入浴場）に行っても、バケツに二はいの湯しか与えられず、これで体と衣服を洗うのであるが、とても垢が落ちるものではない。

このような悪い環境が続く。ソ連自体がドイツと戦い極端な食糧不足で、我々に支給すべき食糧もソ連兵が横取りしてしまう。体力の弱い戦友は益々衰弱し、オーカーといって病弱者となり、遂に帰らぬ人となってしまうのである。

キャベツに粟粒がからまったものが主食として一週間も食わせられたり、大豆を飯盒のふたに一ぱいこれも主食として一週間も食わせられたりして、膝ががくがくして歩くことも困難になった。またコーリャンの原穀（皮のまま精白しないもの）のまま炊いて食わしたり、牛馬の如くで、痔になる者が出る。生存に必要な食糧を形ばかりとするなど人道上許すことは出来ない仕打ちである。

北朝鮮の軍歌を我々にもハバロフスクで歌わせたが、「自由を愛するソビエト軍隊は自由解放の主と讃える歌をうたわせた」。何が自由解放の主かと憤然としたものであった。

極寒のシベリアにも陽春がおとずれ、青空に雲雀がさえずり、若草が芽を出し、暖かいそよ風が吹く。待

望の春がやって来た。ああ助かった、野の草を飯盒に入れ岩塩で味つけをして牛馬の如くムシャムシャと食う。

不思議と体力がつく。ソ連の歩哨に見つかれば取りあげられる。全く血も涙もない奴等である。日本軍が力のつくのを恐れているかの如きやり方であった。

上官の命令であろう。ソ連は日本軍が世界一という ことを日露の戦いで思い知らされているかの如くであった。

名も知れぬ草花が咲き乱れ、そよ風が心地よく吹く。地獄の苦しみも春の太陽の光を身に受けて生き返った心地で、ほっとしている頃、戦友四人とソ連の地方人男女二名の測量士で中年の測量士の助手に出ることになった。

ソ連の地方人はとても人がいい。我々に同情してか親切であった。

それにソ連の歩哨がつかないので、ある程度自由である。地獄で仏とは此のことかと思った。

収容所の近くに年間三万台製作する規模の大きい自動車工場の建設作業を我々収容された戦友はやらせられていた。私たちはその工場に引く水道をアンカラ川から取り入れるための測量であった。近くの一般住宅にも引くことになると見えて、一般家庭の主婦達とも手まねで話し合うことが出来た。

測量の助手作業も六か月で終り、再び重労働の製材工場のカマンゲール（作業隊長）として作業に出ることになった。

測量の助手で片言まじりのロシア語を覚えることが出来たので、ビスカーボーイ（歩哨がつかない）の作業隊長となり、収容所を出発する際に出入口のソ連軍の衛兵所でサインをして作業場に向うのであった。

製材工場は、ピラランマーといってドイツから戦利品として奪い取ったジーゼルエンジンで動かすオサノコで始動する、ものすごい音がした。ドットドットと、ものすごい音がしてとても寄りつけないような大規模な機械と取り組まなければならない。危険で機械に巻き込まれると命がない。

小生はこれはとたじろいだ経験がなかったが、勇気

を出してこれに立ち向かった。

一日のノルマは長さ五・六メートル・木口三十センチの丸太を六名で三十五本製材しなければならない。私と七名の作業隊でやらなければならなかった。百%のノルマを遂行しないと百%の給与（食事）が与えられない。ソ連は我々にハーグ条約で決められた捕虜に対する給与を百%、百二十五%、百五十%、八十%と段階的に区分して支給した。実に非人道的なやり方である。体力の弱い者は、このやり方でも、まいってしまう。我々戦友同士で平等に分配するのであるが、監視が厳しい。

百二十五%の食事でなければとても百%のノルマは達成出来ない。丸太を機械にかけるとザザッ、ザザッと話し声もきこえない。白松の丸太はザザッと音を立ててスムーズに切れて行くが、なかにカラ松の赤松が混って来る。これを機械にかけると、ザザッとしたと思うと煙りが出て来る。機械を止めないと戻ってしまう。

敵国に骨をさらしたくない、小生は考えた。集団窃盗をやることである。敵国の財産だ、命には替えられない、食糧を確保しなければならないと隊員に計った。

老兵の戦友は心配して、もしわかれば隊長は永久に帰れないと反対した。私は独身だ、私一人犠牲になればよいというと、皆真剣な顔をして、よしやろうといって益々団結した。

製材所の脇には火力発電所に使う塊炭の上等な三十センチ立方の石炭を山積した貨車が入って来る。貨車の前後には実弾をこめた小銃をもった地方人のガードマンが警戒に立っている。ソ連では全部国有財産であるからトラックを持って盗みに来るからである。

一日に一人五本の巻煙草が配給されるのを各人が蓄えてこれを隊員二名でそのガードマン二人を買収する。その際に手分けしてドンドンと石炭を、材木を切って山ほど出る木屑の中にかくした。

一週間程して、船員をやっていたという名前を忘れてしまったが体格のガッチリとした勇敢な隊員が、南京袋に詰めた石炭を日が暮れて暗くなるのを見すかして二キロもある町に山越えをして背負って行き、相当

量のジャガ芋と交換して来た。

ソ連ではすべて配給で、塊炭一個あれば一晩中ペーチカを温めることが出来る。製材機を運転しているラボートは気づかない。彼は機械が順調に作動しているので深夜になるとうつぶせとなって眠ってしまう。

材木の切れはしが沢山出るので階下の炉に火をたき飯盒にジャガ芋を入れてむすようにして煮ると、ホクホクして実にうまい。

夜間作業でソ連人はラボートだけで、毎晩ジャガ芋を食うことによって体力がつき、作業能力はぐんぐん上がり、百二十五%は普通で、百五十%まで上げることが出来た。

粟粥のかたいものにメンヨーの肉まで入る。益々能率は上がった。

マツセル（監督）は不思議がっていた。集団窃盗が発覚すると銃殺か永久に帰ることが出来ないかであったが、神仏は我々に味方して発覚しなかった。

ソ連ではバケツ一ぱいのジャガ芋でも現行犯で見つかれば強制労働に連れて行かれる。

ピラランマの作業は全員命がけの作業であった。二年目の冬で十一月頃から翌年の五月頃までの期間であった。

慣れるというものは恐ろしいもので二年目の冬は零下二十五度位になっても耳を出していても平気であった。

軍隊ではピンタを取られ、さっぱりうだつが上らず一兵卒であったが、シベリアに抑留されてから、警官であった本領をどうした訳か発揮した。独身である私は、妻子のある戦友はシベリアで死なしてはならない、祖国に帰さなければならないと心ひそかに思っていた。

再びシベリアの野に春がやって来て姫リンゴの花が咲く頃、今度は貨物自動車で一時間半もかかる煉瓦工場に作業に行った。其処にはドイツの女性が捕虜として働いていた。彼女達は腕に番号をつけた服を着てりりしく働いていた。

ソ連女性とちがって理知的なきりっとした顔だちをして我々日本人に好意的であった。

我々は焼きあがった煉瓦をトラックに積み込む作業

で単純であった。気候も良く、石の上にも三年というが、三年目で抑留生活にも慣れて来た。

三年目の冬を迎える頃、イルクーツク市内にある火力発電所の作業隊長として行くことになった。アンガラ川沿いに長い煙突が五本もある、規模も大きく、石炭を燃して発電する所である。モスク（教会）が隣接しており、ヨーロッパ風の帝政ロシア時代の街イルクーツク市街の中にある発電所で、ヨーロッパに居るようであった。

我々は運んで来る石炭をトラックから降す作業であった。最初は歩哨がついていたが、間もなく歩哨のつかないビスカノボーイとなった。

隊員が寒さにふるえていると、監督であるマツセルがダワイダワイと怒鳴りつける。

私は四トン・トラックを僅か十五分で一人で降ろしマツセルを驚かしたこともあった。普通四名で二十分はかかる。私は二十歳頃スコップを使い慣れていた。

作業が終ったのに、送りのトラックが一時間も遅れることがしばしばあったので、マツセルと取っ組み合いの喧嘩となり彼を投げ飛した。隊員に歩いて帰ろうと先頭になって門を出ようとしたら、守衛が銃を突きつけて来た。私は射てといって胸を広げたところ彼は銃を下げてしまった。

三十代の男盛りで独身である。大和魂の本寅を発揮してソ連人を恐れさせたものであった。

三年目の冬を越し秋が来る頃ハラショウボータ（良く働く）の戦友はダモイ（帰還）出来るという噂がとんだ。みな喜々としていた。

私は其の頃農民として届けていたものがバレて警官であることがわかってしまった。憲兵・警官は反動だ、共産党の徳田球一がソ連に通報して帰さないようにと言った、反動を摘発すれば帰れるなどのデマが流れていた。

秋も深まり四年目の冬が近づく頃、ハラショウラボーターの戦友は毎日夢にまで見ていた帰還が実現し、帰還列車に乗るため収容所を出て行った。

元気でなあ、体に気をつけて力を落さず頑張ってくれと涙を流して慰めてくれる。悲喜こもごもである。

苦闘の生活を共にし兄弟より以上のきずなで結ばれていたので別れは辛かった。

灰色の空から冷たい小雨が降る中を我々反動と言われた戦友は憂うつな面持で一般の戦友と混って住み慣れた収容所を跡に更に奥へ送られた。

着いた所はチレンホアーと云う炭鉱であった。小生と同県人で糸魚川出身の近藤三大君は初年兵時代から一緒であったが、彼も一般兵として共に送られて収容された。彼は衰弱し元気がなかった。彼は帰還して間もなく他界したと聞いている。気の毒な戦友であった。

シベリアから帰還しても間もなく他界した戦友は何の補償もなく全く気の毒である。

チレンホアーでは、発電機が入っている貨車のように路線上に連結された機械を格納する建物の穴掘作業である。

既に四年目の冬に入り、シベリアの冬は夜が長く、暗いうちから粟粥を炊事場から飯盒に受けて腰にぶら下げて、五キロもある作業場へ月の明りを背に受けてトボトボと力なく歩かなければならなかった。

カメラボーターといって石を鉄棒ではね起こし採石する重労働や砂取作業などで、また凍土の穴掘作業などいろいろであった。

昼食の粟粥を温めると水になってしまう。これをノドに流し込むという有様で、此の冬はとても越せそうもないと覚悟した。

北海道出身の警官である私より年配の浅川巡査部長が作業隊長であったが、私に作業隊長をかわってほしいと言われた。隊員の中に高見憲兵曹長もいたが、私に頼むと言われて、ここでも作業隊長となった。

作業現場から更に四キロも離れた所の砂取作業の際にスコップの員数外を持って、更に四キロもあるロシヤ集落に行き、ジャガ芋と交換した。

大黒様のように袋をかついで帰って来て、途中で袋を投げ出してドカッと腰を下し考え込んでしまった。

いっそ逃げてしまおうと遠い空をながめた足もとにインチュウホアの花が咲き乱れているのを見て我にかえり急いで帰ると、隊員が遠くから見つけてスコップを叩いてバンザーイと叫んでいる。逃げないでよかっ

た。隊員達がホクホクしたジャガイモをうまい、うまいと言って喜ぶ姿を見て涙がこみあげてきた。

もう憲兵、警察官だけの作業となっていた。もしあの時逃亡していたら永久に祖国には帰れなかったであろう。

天佑か、神仏の加護か、もう駄目かと覚悟した四年目の厳冬も無事に越すことが出来た。

シベリアの陽春は五月である。昭和二十四年の初夏に入る頃また移動となり、バイカル湖畔を通ると、雲つく程高い切り立った山裾をアムール鉄道が通っている。ナデシコの群生が岩山に点々と咲き乱れ、ロシヤ服を着た婦人が岩山を流れる清水に洗濯物をすすいでいる。赤い屋根の洋風の建物とよく調和して一筆の名画を見る如くであった。

ウラル山脈続きの山山であろう、紫色に映えて雄大な眺めであった。祖国日本のそれと違い、その規模も大陸的で、鉄道沿線には赤、白、黄色の草花が群生して咲き乱れ、どこまでも続く大陸の風景は、狭い日本と異なり人間の気持ちを大きくする。

やがて列車はハバロフスクに到着した。ハバロフスクの収容所は、設備が完備しており、音楽を聞きながら食事をする。バーニャ（浴場）もシャワーで洋風式である。こんな収容所もあったのかと思う程待遇の良い収容所であった。

最初は一般民家の補修作業などであった。私はチレンホアで体が衰弱していたせいか激しい下痢に襲われた。ソ連軍医の診察を受けて入室させられた。

その病室は清潔そのもので軍医も親切丁寧であった。寝台の枕元には部厚い唯物史観やソビエット人民の歩いて来た道など日本語に訳した本が置いてあった。私はそれを見ようともしなかった。

初秋の頃ようやく退室させられた。今度は水道布設工事の作業隊長として作業に出た。

作業に出発する時は赤旗を掲揚し労働歌を歌って収容所を出発する。帰る時も労働歌をうたって入所する。

日曜日にはデモの練習をするというような収容所であった。このようなことを忠実にやらなければ反動として何時までも帰れないとのことであった。

昭和二十四年一月中旬頃帰還の命令が出た。最初は夢ではないかと耳をうたぐったが本当であった。何時までも興奮がおさまらなかった。帰還列車に乗ることが出来た。晩秋の山々は祖国の山々に似ていた。汽笛が山々にこだまする。ボーボーと祝福するようである。月夜で雁が祖国に告げに行くように編隊を作り飛んで行く。すべてが喜びである。ナホトカにしばらく滞在していると恵宝丸七千トンが入港した。

待ちに待った帰還船である。いよいよ乗船である。タラップを一段一段踏みしめて上る気持ちは何とも形容し難い。船は錨をあげて岸壁を離れるとナホトカの山がボーとかすんで見えなくなった。

もう大丈夫だという安心と喜びとで涙も出なかった。舞鶴に入港したら、祖国の山々は青々とし、対岸に可愛い子供達が日の丸の小旗を振って、兵隊さんと呼ぶ声に涙がボロボロと頬を伝い、それをぬぐおうともしなかった。

国滅びて山河あり、よし生還した。これからやるぞという勇気が湧いて来た。

舞鶴の引揚援護局で私の名前の上に赤丸がついていた。作業隊長をやって来たから共産党と見られたのかとは後でわかった。

舞鶴に十二月四日上陸し、手続きをして生家に帰ったのが昭和二十四年十二月十一日であった。

奇しくも此の日は亡父の命日で、祥月命日であった。母の胸に手をやり、今帰った、と言ったら、分家の者達や親類の者はみんな泣いていた。

足掛七年振りであった。村から大勢戦死している。私は、出迎えに出てくれた村人に、生還しました、此の体を再び世の中の為めにささげますと誓った。

県庁に復職のあいさつに出向いたら、良いところがあったらそちらへ行ってほしいと言われた。私は唖然とした。良い所などあろう筈はない、どうかよろしくお願いしますと言った。

こんなに冷たく扱われるとは思わなかった。すっかり共産主義者と見られてしまった。しかし復職したら上司先輩は親切に迎えてくれてほっとした。

後の烏が先になり同期後輩は金すじ、銀すじとなり、

自分の伜のような巡査部長に敬礼し指示命令を受けなければならない。銃後にあって召集を受けずに残った人達はすべて良い地位についているが、私は平巡査で新任巡査よりはるかにむずかしい心身共に疲れる仕事をやらなければならなかった。生活環境も悪く、ずいぶんと苦労した。

しかしシベリアのことを思えばと、ただ黙々と聖職に励んだ。

昭和五十年三月三十一日付をもって軍隊と抑留期間を通算し三十三年三か月、任警部補で円満退職し聖職を全うすることが出来た。

伜が司法試験に挑戦するので更に十年働いた。平成元年秋の生存者叙勲に天皇陛下から勲章をいただいた。神仏は見はなさなかった。

【執筆者の紹介】

現住所　新潟県新潟市上木戸七二七

本籍地　新潟県新潟市上木戸七二七

生年月日　大正七年一月二十四日

入隊　昭和十八年十月二十日　満州東安一三八七部隊

終戦時の居住地　満州四平街

入ソ日　昭和二十年十月三十一日

抑留地　イルクーツク

作業　建築

引揚　昭和二十四年十二月四日

引揚船　栄豊丸

上陸地　舞鶴

（新潟県　吉田　忍）

青春の思い出

静岡県　黒田仁朗

昭和十四年二月歓呼の声に送られて、郷土原田村を出発し、大阪の難波別院に集合した。

今日から帝国軍人であり、男子の本懐これに過ぎるものはなく、これで私も日本人として一人前であり、